

## 地震の記念碑 (NO. 26)

### 足柄上郡山北町清水地区および三保地区の地震の記念碑

神奈川県温泉地学研究所 平野富雄

神奈川県の北西部に位置する山北町は、224.25knfの面積を有する広大な町である。県内では横浜市に次ぐ広さで、町の大部分は丹沢大山国定公園と県立自然公園に指定された丹沢山塊が占めている。丹沢山塊を東丹沢と西丹沢に分けると、山北町はまさに西丹沢の町といえる。東丹沢では大山や雨夫利神社、七沢温泉や鶴巻温泉などが良く知られ、西丹沢では丹沢湖や中川温泉が観光名所となっている。

丹沢湖の北に位置する中川の集落に古くから湧出する温泉は、信玄の隠し湯の一つといわれ、大変アルカリ性の高いことで、つとに有名である。温泉のpH(ペー・ハー)は10.4にも達し、我が国の最高である。

この中川温泉に行くには、国道246号線を清水橋の信号で右折し、緩い坂道を河内川に沿って車を走らせる。丹沢湖ができる以前は、神縄から神尾田、落合、大仏へと道が延びていた。私は1963(昭和38)年以降、中川温泉への調査のために、何十回となくこの道を通ったのである。

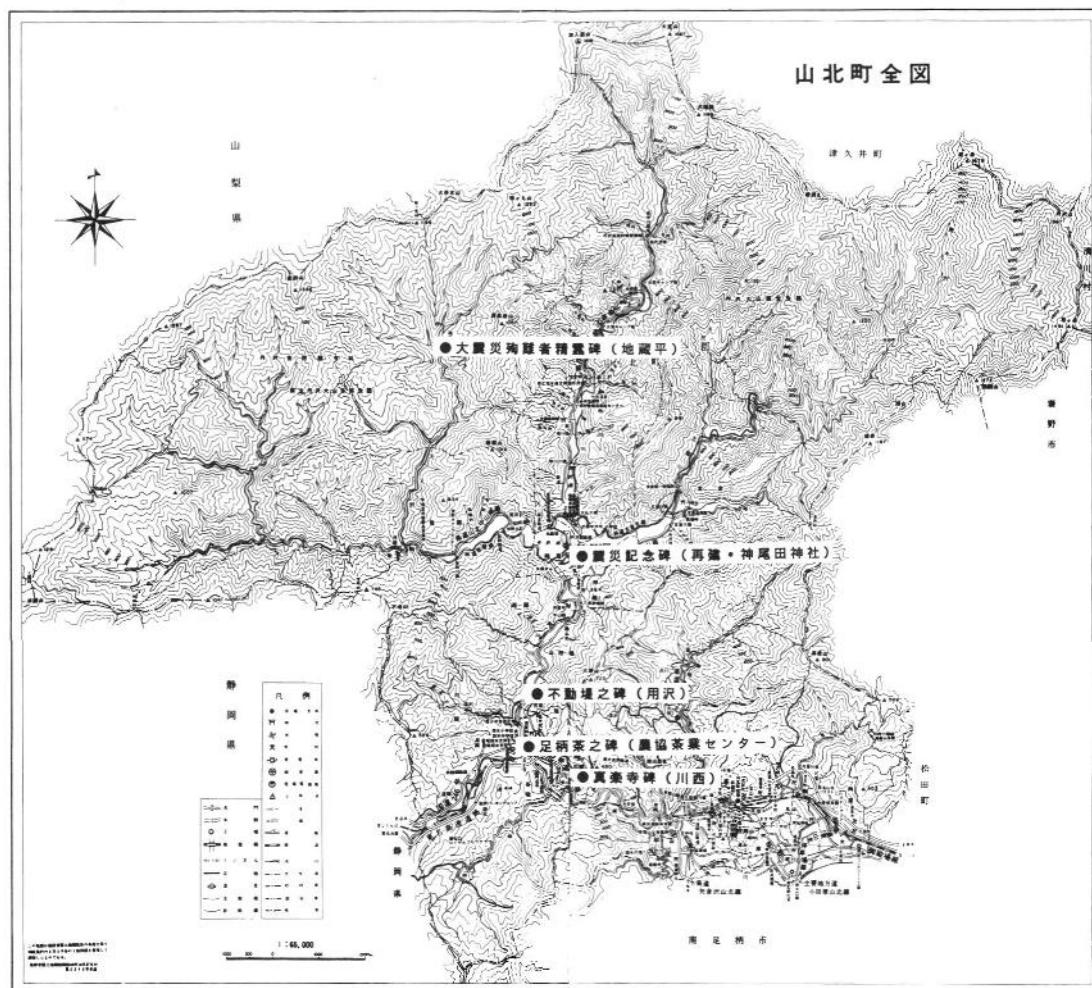


図1 山北町清水地区および三保地区の地震の記念碑分布図

忘れがたい落合、田ノ入りの災害記念碑

落合は周囲が山に囲まれ、さながら緑のすり鉢の底に居ようだった。この落合で、中川川の流れを合わせた玄倉(くろくら)川と世附(よづく)川とが合流し、この下流から川の呼び名が河内川に変わるのである。

落合の下流の神尾田に、三保ダムという多目的ダムを建設して人造の丹沢湖を作る計画が実施に移されたのは1974(昭和49)年のことである。

三保ダムが出来る以前は、落合は中川と世附からの道が出会う場所でもあり、落合館という旅館が建っていた(図2)。その店先では喉を潤す飲物などが売られていたので、中川温泉での調査を終えて帰るときには、しばしば車を止めて休憩した。落合館の西隣には、1920(大正9)年8月3日の豪雨で大又沢が壊滅的な被害を受けたことを記録した、災害記念碑などが建っていた(写真1、2)。

築堤工事は1978(昭和53)年に完成し、同年3月1日に三保ダムの湛水式が執り行われ、貯水が開始された(実際は2月28日未明から始まる)。

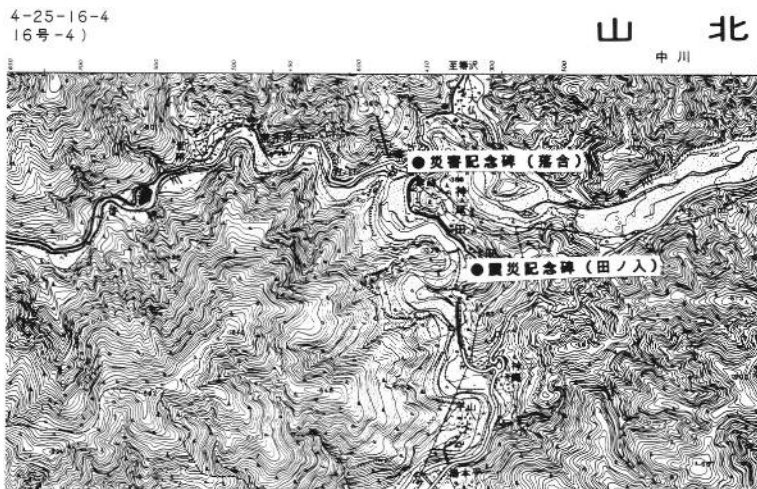


図2 丹沢湖誕生以前の神縄～落合付近  
(国土地理院、2万5千分の1地形図山北、昭和51年による)

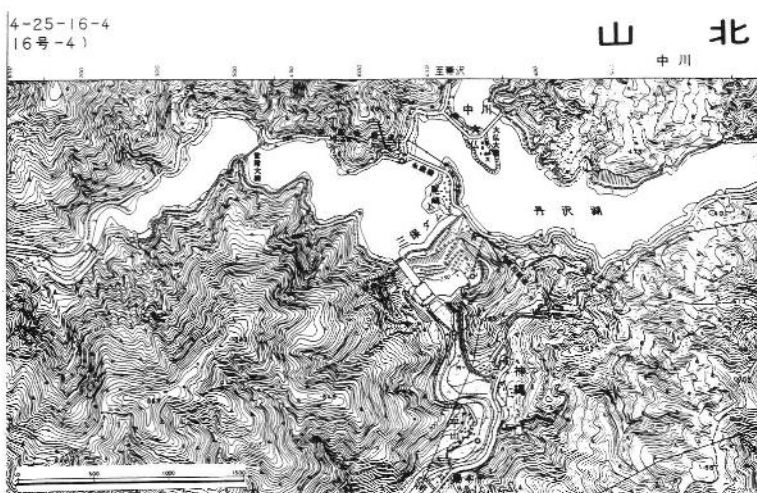


図2 丹沢湖誕生による現在の神縄～三保ダム付近  
(国土地理院、2万5千分の1地形図山北、平成2年による)

## 再建された神尾田神社の震災記念碑

神尾田の田ノ入のバス停わきには、観音像などの石仏群があった。顔が欠けたりした石仏の右側に、ひととき大きな石碑が建っていたが、それが関東大地震の震災記念碑であった（写真3、4）。碑には、大地震の時に裏山が崩れて2戸が潰れて3人が負傷し、田の入りにあった発電所の取水堰堤も崩れたことが記録されていた。

図3は現在の三保ダム、丹沢湖付近の地形図である。ダムで堰止められた水が中川川、玄倉川、世附川の谷を満たしている。この人造湖の周囲は21.5km、有効貯水量は5,450万 $\text{m}^3$ である。今では田ノ入りの石仏群も無くなり、災害記念碑の建っていた落合は湖底に沈んでいる。

ダムの建設で、田ノ入りの震災記念碑はどのようになったか気になっていた。三保ダム管理事務所の南側の小高い小山の上に神尾田神社が再建されたが、この神社の境内に、こじんまりとした震災記念碑が建てられている（写真5）。

中央に震災記念碑と刻まれたこの石碑の右側に大正十二年九月一日、左側に昭和五十年一月再建と刻まれている。石碑に刻まれた年月から、これが田ノ入りに建っていた震災記念碑が、形を代えて再建された物で



写真1 落合の落合館とその脇に建っていた災害記念碑  
(1974 (昭和49)年撮影)

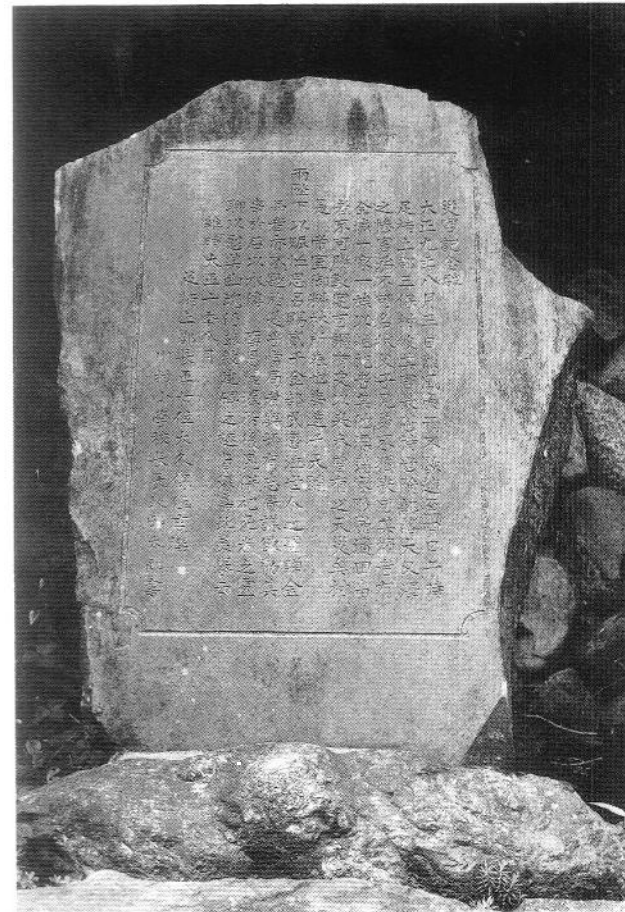


写真2 1920 (大正9)年8月3日の豪雨による大又沢の被害を記録した災害記念碑  
(1974 (昭和49)年撮影)

あることが分かるのである。しかし、石碑には再建の詳しい謂われは刻まれていない。田ノ入りに建っていた石碑のことを知らない人たちには、この石碑の意味は分からないに違いない。それにしても、落合や田ノ入りに建っていた水害や震災の記念碑は、どこに行ってしまったのだろうか。

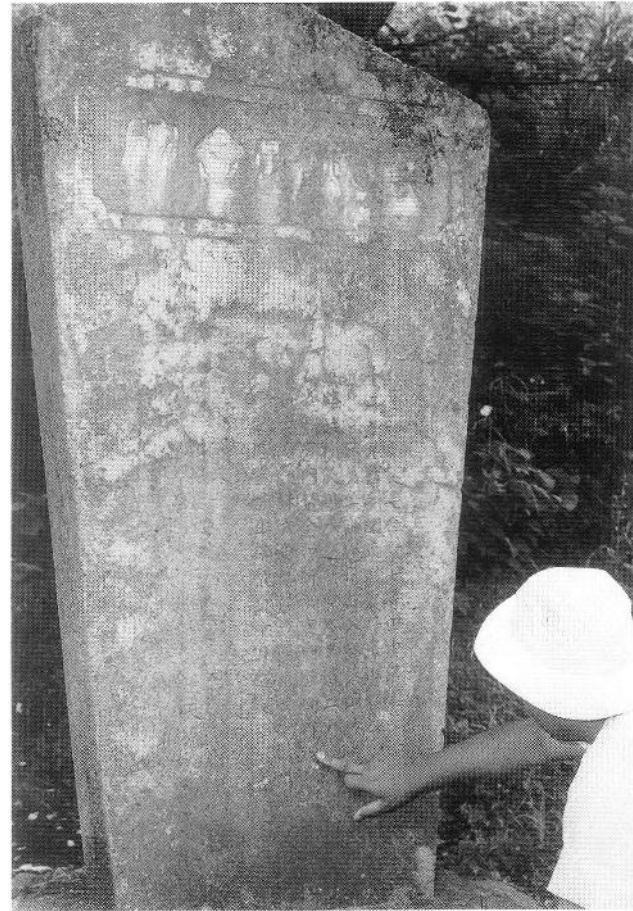
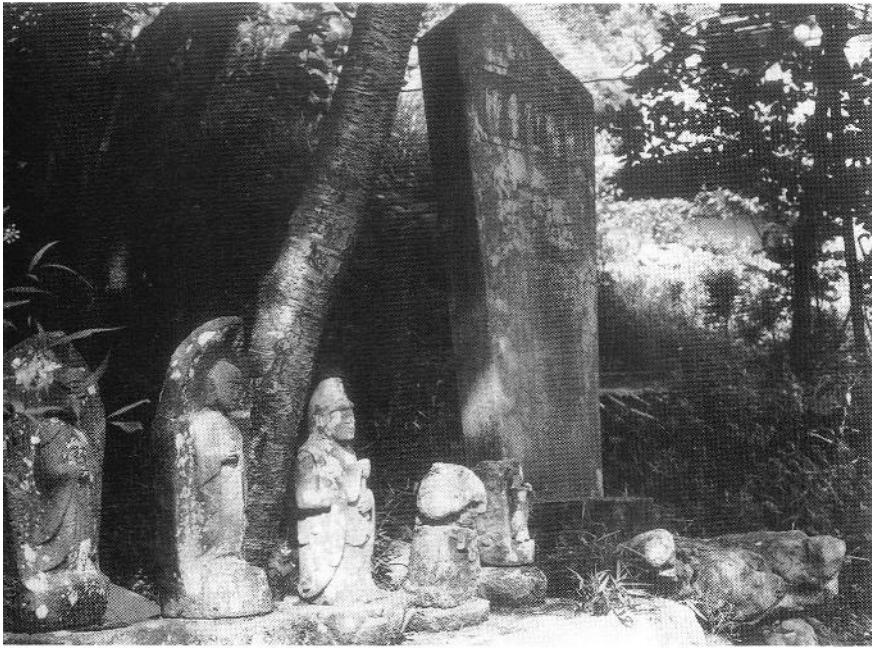


写真3 (上左) 田ノ入りの石仏群と震災記念碑  
(1974 (昭和49)年撮影)

写真4 (上右) 田ノ入りの震災記念碑  
(1974 (昭和49)年撮影)

写真5 (左) 再建された神尾田神社の震災記念碑

地蔵平の大震災殉難者精霊碑

地蔵平といっても、それが山北町内にある場所と知る人は少ないに違いない。百万遍念仏を伝えてきた世附の集落も湖底に沈んですでに無くなったが、その奥の浅瀬から大又沢を5kmほど遡った所が地蔵平である。

かつては、ここに10戸ほどの小さな集落があった。1960(昭和35)年に浅瀬方面に全戸が転居して、今では路傍のお地蔵さんだけが人の営みの跡を伝えている。ここに地震の石碑が建っていることを、平賀士郎博士から聞いたのは今から20年も前のことである。

その当時、平賀博士は箱根火山の地震観測を精力的に行うかたわら、地蔵平などにも地震計を設置して、西丹沢でも地震観測を実施して居られた。研究所の研究部長を1980(昭和55)年から努められたが、在職中の1987(昭和62)年に物故されて大変惜しまれた。

地蔵平の集落のあとは、道路の西側の桧の林の中に埋もれていた。木々で覆われてはいるが、家の境の石垣や土台石などが昔のままに残っている。かつては、お地蔵さんの北側の道上に数軒の民家があり、南側の道下に学校や治山事務所などが建っていた。平賀博士から聞いた石碑は、学校跡付近と思われる所に建っていた(写真6)。

大震災殉難者精霊碑  
大正十二年九月一日午前十一時五十八分  
死亡者 金森巡査 長谷川新助  
後藤寅次郎 降矢いし  
昭和二年八月建之



写真6 地蔵平の大震災殉難者精霊碑と、その西側に建つ遭難者精魂碑

そこに建っていたのは、地震の碑ではなかった。大震災殉難者精霊碑の西側に並んで遭難者精魂碑が建っていた。この遭難者の碑は登山者のものかと思ってさして気にもしなかった。しかし、遭難の日付けが1920(大正9)年8月4日となっているので、これは落合にあった災害記念碑と同様に、豪雨による犠牲者を供養するものであろう。

## 用沢の不動堤之碑

大震災殉難者精霊碑は高さ 180cm 程で、裏面に地震で死亡した 4 人の名前が刻まれている。当時の人口は知るよしもないが、かなり高い比率で死者が出たことになるだろう。この碑には、地震で起きた詳しいことは記されてなかった。

河内川沿いにはいくつかの集落が点在しているが、用沢もその一つである。この集落のはずれに不動堤之碑が建てられている。河内川に沿って丹沢湖方面に車を走らすと、右手に馬頭観音等の石仏群が見えてくる。その中で、ひとときわ高い石碑が不動堤之碑である（写真 7）。

この石碑については、すでに「地震の石碑、第 10 回」（温泉地学研究所報告、第 10 巻、第 3 号、1979）で紹介した。その時は、スペースの関係で碑文を全て載せることが出来なかったので、今回改めて全碑文を収録しておくことにした。

### 不動堤之碑

神奈川農耕地課長 芝池 真吉書

大正十二年九月一日関東大震災勃発シ家屋ノ倒壊山林ノ崩潰耕地ノ埋没流失其ノ惨状実ニ言語ニ絶セリ殊ニ湯触区大蔵野地先河内川沿岸ノ水田六町余歩ハ悉ク流失シテ河原ニ変ズ住民ハ為ニ唯一ノ生活資源ヲ奪ワレ疲弊困憊其ノ極ニ達シ將ニ破産離郷者ヲ見ムトスルニ至レリ上地篤農家山崎喜一郎氏大ニ之ヲ憂ヘ有志池田勘太郎氏ト相謀リ部落全員四十九名ヲ糾合シ自ラ謀主トナリ耕地ノ復旧拡張ヲ企画ス仍チ昭和四年十月河内川ノ一部ニ公有水面埋立ノ免許ヲ得荒廢セル旧耕地ヲ併セテ昭和五年十一月用沢耕地整理組合ヲ設立ス爾來組合長山崎喜一郎氏日夜寢食ヲ忘レ東奔西走事業ノ進捗ニ没頭シ組合亦協心戮力各其ノ勞務ニ服シ農当局ノ多大ナル援助ヲ得遂ニ昭和九年八月末日全工事ヲ完成ス護岸延長四百六拾六間水田ノ造成參町八反七畝余復旧水田四反七畝余道路溝渠整然トシテ茲ニ面目ヲ一新ス總事業費四万六千八百余勞務ニ従事シタル延人員実ニ三万五千八百人ニシテ農補助金貳万參千六拾円余ヲ交付セラル本護岸堤ハ組合全員ノ心血流汗ノ結晶ニシテ特ニ不動堤ト称シ耕地ヲ喜一郎新田ト名ツク爰ニ其ノ梗概ヲ刻シ碑ヲ建テ後世ニ其ノ事績ヲ傳ヘムトス

昭和九年十月建之 足柄上郡清水村用沢耕地整理組合

神奈川農耕地課長正五位勲五等 芝池 真古 篆額

同 農林主事補 大城 信重 撰

同 松田耕地整理出張所長 黒田 空一 謹書

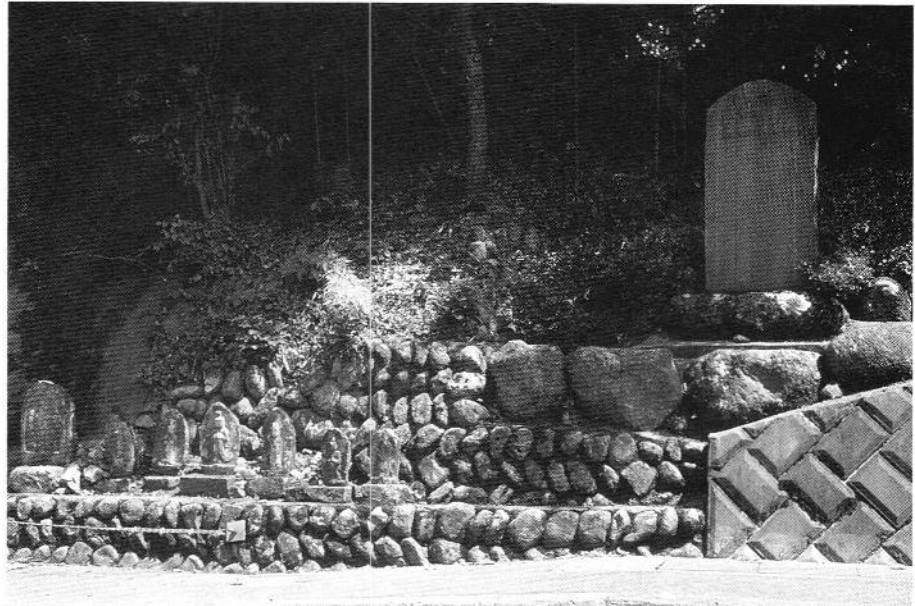


写真7 用沢の不動堤之碑

この不動堤之碑は、地震で大きな被害を受けた後の、地域の復興の記録である。これまで各地に建てられた地震の記念碑を訪ねてきたが、被災後の地域の人々の復旧への努力と、それを成し得た後の地域振興の喜びを刻んだ記念碑には、しばしば感動させられた。この記念碑も、自然災害が多発する地域に住む私達に、多くのことを教えている。

足柄地域では、酒匂川の氾濫が二宮金次郎（後の尊徳、1787～1856年）という偉大な人物を育んだことは良く知られているが、不動堤を築いて荒れた耕地の復旧を図った山崎喜一郎氏もまた、地域の偉大な指導者であったと言えるだろう。

山北町山市場の鈴木治平という方から、1994（平成6）年10月21日に次のような内容の電話をいただいた。

「天文12年にこの辺りに地震があったらしいが、どんな地震か分かるだろうか。川西の真楽寺の石碑に、その地震のことが書いてある」と言うのである。

私はすぐに理科年表で被害地震年代表を調べてみた。しかし、天文年間（1532～1554）には、被害地震は記されてなかった。鈴木氏には満足な回答ができなかったのである。

そこで、何はともあれ真楽寺に行って、鈴木治平氏に教えていただいた石碑を見ることにした。真楽寺の住所は「神奈川県足柄上郡川西（嵐）二七三番地」で、ここは丁度、東名高速道路の都夫良野トンネルの御殿場側出口付近にあたる。

河内川に架かる川西橋を左に曲がると用沢や丹沢湖方面に行くが、真楽寺に行くにはこの橋を右に曲がる。ここから東京電力の嵐発電所をすぎて、急な坂道を登ると、めざす寺が茶畑の向こうに見える。

川西の真楽寺の碑に  
刻まれた1543（天文  
12）年の地震

1543（天文12）年の記録が残る古くからの寺だと言うが、本堂をはじめ庫裏などの建物は随分新しかった。その理由は、本堂の前の広場を隔てた南側に建てられた記念碑を読んで納得した（写真8、9）。

浄土真宗西本願寺派勸山真楽寺

神奈川県足柄上郡川西（嵐）二七三番地

開山は親鸞聖人の弟子の顯智坊と伝えられ鎌倉初期（一二三〇頃）川西一〇九番地に建立された  
当時は附法道場として鐘堂山門庫裏等完備されており親鸞聖人も寄寓されたと伝え  
られている 尚当寺にて法然上人の弟子の天野四郎又の名大盗耳四郎こと教阿陀佛入寂  
天文十二（一五四三）年地震に依り崩壊 八十年後の寛永元（一六二四）年 現住所に檀信徒二十四  
名にて再建 明治九（一八七六）年より大正二（一九一三）年までの三十七年間川西村尋常高等  
小学校として使用された 昭和五（一九三〇）年住職長屋光円師を迎えるに当たり本堂山門  
庫裏を改修 昭和四十八（一九七三）年本堂内部及び庫裏を改修 昭和六十三（一九八八）年左に  
列記する檀信徒三十三名と東名高速道路工事中の大日本土木㈱トリア工業㈱共同企業  
体の絶大な協力を得て銅板に依る屋根替完成に至る

寄付者芳名

（省略）

真楽寺檀徒代表

藪田 進

佐藤 繁

大野 和雄

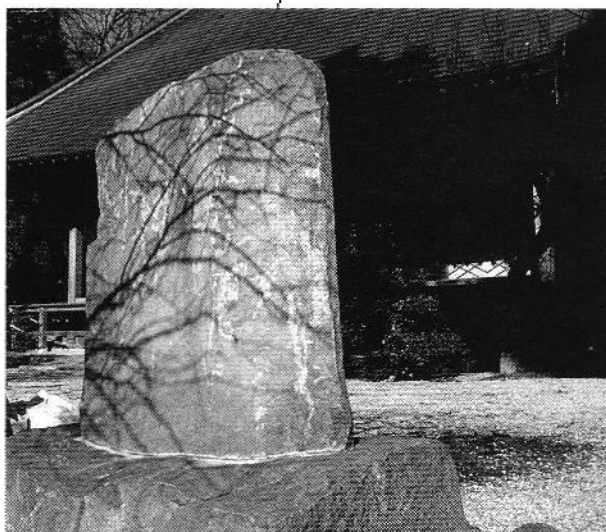


写真8 川西の真楽寺本堂と碑



写真9 真楽寺の記念碑



## 農協茶業センターの 足柄茶之碑

石碑は1988(昭和63)年4月の建立で、1973(昭和48)年に行った本堂内部や庫裏の改修と、1988(昭和63)年の屋根替を記録したものであった。

問題の1543(天文12)年の地震だが、碑には「天文十二(1543)年地震に依り崩壊 八十年後の寛永元(1624)年 現住所に檀信徒二十四名にて再建…」と記されているだけで、詳しいことは書かれていない。

今回、この真楽寺の石碑のことを書くに当たり、足柄地域の寺の再建の記録などで天文の地震被害の記録を探したが、今のところ、これ以外には見あたらない。

県西部では江戸時代以降の400年間に、ほぼ73年毎に小田原直下を震源とする地震が繰り返しおこっている。記録に残る最初の小田原地震は1633(寛永10)年の地震で、それ以前にも同じ様な地震が起きたと考えられている。石橋克彦博士は、1556(弘治2年)に小田原でかなりの地震があった可能性を示されている(大地動乱の時代、1994、岩波新書)。

真楽寺の石碑に記された天文の地震は、1556(弘治2)年より更に13年古い地震ということになる。県西部の地震の歴史を調べる上にも、この天文の地震の記録は無視することはできそうもない。ちなみに1543(天文12)年という年は、日本史上ではポルトガル船が種子島に鉄砲を伝来させたことで良く知られている。

機会を得て真楽寺の檀徒代表の方々を訪ねたりして、天文の地震の調べを続けようと思っている。山市場の鈴木氏にも調査をお願いしようと思う。

足柄茶で知られる農協の茶業センターが、峰の東京電力峰発電所の前にある。国道246号線の清水橋のすぐ近くである。

丹沢湖など西丹沢を訪れた人たちが、ここで土産を買うために大勢立ち寄っている。入口の左手に大きな自然石の石碑が建っていて、「足柄茶之碑」と記されている(写真10)。



写真10 農協茶業センター前に建つ足柄茶之碑

## 足柄茶はここに五十周年を迎える

関東大地震によって、山村での生活基盤を一挙に失い、その復興策として大正十四年茶の導入が旧清水村役場によって図られた。昭和二年、手もみによる共同製茶を開始し、昭和三年には村営製茶工場が建設され、以後苦難の道をたどりつつ茶の生産は年々拡大した。

太平洋戦争中及び戦後の食料不足時代を

辛うじて乗り越えてきた茶は、昭和二十五年以降関係各機関の援助のもとに復興が進み生産量が増加した。これを契機に荒茶加工は部落の共同工場が、再製加工は農協がそれぞれ分担し、足柄茶の銘柄で直売方式による販売が開始された。一方、南足柄、松田、秦野、小田原、湯河原、

地方でも茶の振興が図られ、続いて昭和四十年以降は清川、津久井地方を加えた産地拡大が急速に進められた。昭和三十九年これらの各地区で生産された茶の規格統一と有利販売を目標として近代的な茶業センターが山北町に完成した。

昭和三十三年以降、全国茶品評会において連続上位入賞昭和四十九年関東ブロック茶の共進会の優等人賞等数々の荣誉に輝き足柄茶として全国的に認められるようになった。

足柄茶が清水に生まれて半世紀、改めて先覚者、祖先の労苦を偲びその偉業をたたえ末永く後世の発展を念願してこのゆかりの地に碑を建立するものである。

昭和五十年十一月吉日

足柄茶五十周年記念事業実行委員会

石碑の裏にまわると、「足柄茶はここに五十周年を迎える」という表題で、この地で育まれた足柄茶の謂われが書かれている。この足柄茶も、関東大地震で被害を受けた山村の復興手段であったことを、改めて知るのである。

この碑は1975(昭和50)年に、足柄茶の50周年記念事業として建てられたが、関東大地震によるこの地域の人たちの苦労のあとがしのばれる。地震で被害を受けた後に、その復興に努力することが、地域にとってどんなに大切なことであるかということ、この石碑が教えている。